

ハ ゆゑ ん フ シヲ
学校 所ニ以養^レ士也。

訳…学校は人材を養成するため（の機関）である。

しかレドモいにしへの
然 古之聖王、其意^a不^ニ僅此^一也。

そうではあるけれども、古代聖王は、その（Ⅱ学校を作った）意図は、
単にこれだけではない。

ズメ ムル ヨ のぐヲシテ デ ヨリ
必使^下治^ニ天下^一之具 皆出^中於学校上、

（古代聖王は）必ず天下を治める政策が全て学校から提案されるようにさせて、

しかル ニクル ヨ メテ ハル

而後設^ニ学校^一之意始備。

そうしてやっと、学校を設置した意図がやっと満たされる（と考えた）。

てんしの ゼトスル ダ ズシモ ナラ

天子之所^レ是 未^ニ必 是^一、

天子が正しいと認めたことは、必ずしも正しいとは限らない。

ひトスル ダ ズシモ ナラ

天子之所^レ非 未^ニ必 非^一。

天子が正しくないと非難したことは、必ずしも正しくないと限らない。

またつひニ ズ あヘテみづからなサズ ひゼヲ

天子亦遂^b不^ニ敢自^為ニ非^是一、

天子もまた、決断に当たっては自分から（政策の）是非を（独断で）決めようとは

せず、

シテおほやけニス ノ ヨ ニ

而公 其非是於学校^一。

その（Ⅱ政策の）是非を学校において、公論させた。

是故養^レ士^ヲ為^{タルモ}一^の學校之一事^一、

こつやつて、人材を養成するのは學校の一つの役目ではあるけれども、

而學校不^{ハズル}二^{ハズル}僅^{わづかニためノミニシテ}為^フ一^ヨ養^レ士^ヲ而設^{まうケラレ}一^{なり}也。

學校は単に人材を養成するためだけに設置されたのではないのである。

三代以下、天下之是非^{いつニツ}一出^{ヨリ}於朝廷^一。

夏・殷・周という理想の治世が終わった後の時代、天下の（政策の）是非は専ら朝廷で決定されている。

天子榮^{えいとスレバ}レ之則群趨^ヲ以為^{チぐんはりシテ}是^{テシト}、

天子があることを榮譽だと判断すれば、群臣は急いでそれを正しいと褒め称え、

天子辱^{じよくトスレバ}レ之則群擿^ヲ以為^{なげうちテ}非^{テスト}。

天子があることを恥だと判断すれば、群臣は投げ捨ててそれを正しくないと貶す。

而其所謂學校者、科挙^{シテ}鬻^{ノいはゆる}爭^{ナルものハ}、富貴^{かきよモテがうさうシ}熏^{ふうきモテくんしんス}心[。]。

そうやって、その世に學校と言われるものは、科挙のために争い、富や地位のために心をこがす場所となった。

亦遂^{またニ}以^テ二^{のせいりヲ}朝廷之勢利^{いつ}一^{ペンスノ}變^ヲ其本領^一。

また、結局、（學校は）朝廷での権勢や利益（を得る）ため（の場に）、その本分をすっかり変えた。

而^{シテ}士^の之^ル有^{もの}二才能學術一^者、

そして、男子の中で才能や学識がある者は、

且^{かつ}往^{おう}往^{おう} 自^ニ 拔^{ミヅ} 二^於 草^{そう}野^や之^の間^{かん}一^ニ、

さらに、しばしば自力で民間から頭角を現し、

於^{イデ}ニ^ニ 学^メ校^{ヨリ}一^な 初^キ 無^あレ^づ 与^{カル} 也^{コト}。^{なり}

学校は初めから関与することがない。

究^{きう} 竟^{きやう} 養^フレ^フ 士^フ 一^イ 事^チ 亦^モ 失^シレ^テ 之^ノ 矣^ヤ。^{これヲ}

結局、（学校は）人材を養成するという一つの役目もまた失ってしまった。